

記録
35ミリ
カラー／50分

■企画
日本林業技術協会
■監修
林野庁

スタッフ
■製作
菱輪満夫
■脚本
小野春夫
■演出
村山英治
徳永瑞夫
■撮影
加藤和郎
■照明
波田実男
■編集
沼崎梅子
■音楽
三木 稔
■解説
小山田宗徳

東京都教育映画コンクール銀賞

太平洋戦争中の乱伐で、日本の森林は荒廃して戦後を迎えた。この映画は、戦後の国有林の近代化の歩みを描いたものである。



森林鉄道が建設されたのは、明治末から大正、昭和の初めまでであったが、日に何回も走らない小さな汽車は、山村社会の象徴でもあった。そして今、森林鉄道は消え去ろうとしている。映画は山村の老人たちの回想から昭和20年代に遡る。

昭和22年、国有林は、御料林130万ヘクタールと内務省管轄の北海道の国有林245万ヘクタールをあわせて、792万ヘクタールという形で新しい出発をした。その面積は、日本の森林の3分の1、木材量では2分の1に達する。統一後は、戦後引揚者や失業者で農村に溢れた労働力を集めて、戦災で焼野原となった都市の復興のために木材の生産に乗り出した。しかし、その作業は昔ながらの人力重労働による作業であった。戦後約10年間は、しばしば台風の被害を受けた。特に昭和29年のいわゆる洞爺丸台風は、林政史上類をみない被害をもたらし、この時の風倒木処理が国有林の機械化の大きな動機になった。昭和30年代は国有林の機械化が急速に進んだ。例えば、チェーンソーは昭和30年には300台しかなかったが、5年後には3000台に達している。林道の開発も進み、鉄道にかわってトラックがその運搬を担うようになっていった。林道とトラックの伸びに伴い、苗畑や貯木場もまとめられ、機械化が体系的に進んだ。また除草剤や、病虫害防除、ネズミ退治の薬剤散布も空から行ない、伐採や植林も楽にできるようになった。国有林の担い手は若者たちである。国有林の仕事は、木材の生産、国土の保全、水資源の確保、レクリエーションの場としての森林活用などであるが、より多くの緑の遺産を次代に残すことも忘れてはならない。